

らっかせいの大菌核病（新発生）

平成 30 年 7 月、音更町において、施設栽培のらっかせいに地際から茎が腐敗し腐敗部には 2～6 mm の菌核を形成する症状が認められた。腐敗部から分離した菌株をらっかせいの小葉および茎に接種したところ腐敗症状が再現された。分離菌は、PDA 培地上で白色ないし黄白色の菌糸が放射状に生育し、2～8 mm 長の菌核を形成した。菌糸伸長の最適温度は、20～25℃であった。Abd-Elmagid et al (2013)により報告された Aspartyl protease 遺伝子の特異領域は *Sclerotinia sclerotiorum* (Libert) de Bary と一致し、形態的特徴と遺伝子解析から本菌を *S. sclerotiorum* と同定した。なお、国内では本症状を示す病害として既に *S. miyabeana* Hanzawa による大菌核病が報告されており、*S. sclerotiorum* を新たに病原として加えることを提案した。

（十勝農試・北海道大学）



らっかせいの大菌核病（空知農業改良普及センター北空知支所 太田氏 原図）